# 2. 正教とロシア1

#### 2.1. はじめに

「正教(会)」は、「東方正教(会)」、「東方キリスト教」と言うことがあり、英語では The (Eastern) Orthodox Church 「(東方)正教会」と言う。「東方」 Eastern という言葉が付されるのは、カトリックやプロテスタントが西欧で広がったのに対して、正教が中近東、バルカン半島、ロシア等に広がったためである。したがって、「東方正教(会)」と対比して言う場合、カトリックやプロテスタントを「西方キリスト教」または「西方教会」という言う場合がある。正教会自身は、「東方正教会」という言い方を認めつつも、自らの教会をたんに「正教会」と呼んでいる<sup>2</sup>。

正教を信仰している人々が多数派となって暮らしている社会、ないし正教文化が強い影響力を持っている地域は、現在、主としてバルカン半島および旧ソ連の一部(アルメニア、ウクライナ、ギリシア、グルジア、セルビア、ブルガリア、ベラルーシ、マケドニア、モルドヴァ、ルーマニア、ロシア)である。しかし、歴史的には、正教は、バルカン半島および旧ソ連の一部にとどまらず、現在、一般に「イスラム文化圏」、「中東」、「アラブ世界」といった言葉で呼ばれている地域をも含む、より広汎な地域で信仰されていた。

## 2.2. ビザンツ帝国(東ローマ帝国)の歴史

前509年 古代ローマの共和政の始まり。

前27年 ローマ帝国、帝政へ移行。

330年 ローマ帝国、コンスタンティノープルに遷都。

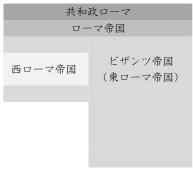
395年 西ローマ帝国の成立。首都はミラノ。

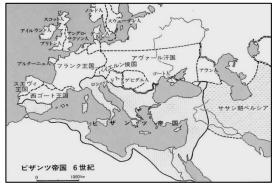
476年 西ローマ帝国の崩壊。

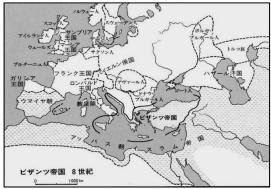
550年頃 ローマ帝国ユスティアヌス帝、地中海世界を再統一。

800年 ローマ教皇レオ 3 世、フランク王国カール大帝 (シャルルマーニュ) に帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言。

1453年 コンスタンティノープル陥落。ローマ帝国の崩壊。







#### 2.3. キリスト教の発展

前27年 ローマ帝国、帝政へ。

30年頃 イエスの処刑。この後、キリスト教おこる。

301年頃 アルメニア、キリスト教を国教とする。

313年 ローマ帝国、キリスト教を公認。この頃のキリスト教徒は人口の10%程度と推定される。

325年 ニカイア (第1回) 公会議。「父なる神」、「子なるキリスト」、「聖霊」の三者関係について、「 父と子の同一実体」説、「聖霊は父から発する」との解釈を提起。

<sup>1</sup> 本講義の参考文献としては、とりあえず、森安達也『ビジュアル版世界の歴史 9 ビザンツとロシア・東欧』(講談社、1985)、和田春樹編『世界各国史 22 ロシア』(山川出版社、2002)、田中陽児・倉持俊一・和田春樹編『世界歴史大系 ロシア史』全3巻(山川出版社、1995~97)のうちの第1巻を紹介しておく。

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> 日本正教会ホームページでは以下のような説明がなされている。「正教会は東方正教会とも呼ばれます。ローマ・カトリック 教会やプロテスタント諸教会が西ヨーロッパを中心に広がったのに対し、キリスト教が生まれた中近東を中心に、ギリシャ、 東欧から、ロシアへ広がりました」。(http://www.orthodoxjapan.jp/seikyoukai.html)

- 350年頃 グルジア、キリスト教を国教とする。
  - 381年 コンスタンティノープル (第2回) 公会議、ニカイア公会議の解釈を確認。 「子」の従属性を主張するアリウス派 を異端とする。
  - 392年 ローマ帝国のテオドシウス1世、キリスト教を国教とする。
  - 431年 エフェソス (第3回) 公会議、「信条」の改変を禁ずる。
  - この頃 教会制度が確立される。使徒ペテロが 殉教したローマの教会、次いで首都コ ンスタンティノーブルの教会が高い 地位を占めた。
  - 451年 カルケドン(第4回)公会議、キリストにおける「神性」と「人性」の関係を「混合・変化・分割・分離しない」とする「カルケドン信条」を作成。キリストは単一の性を持つとする単性論3、キリストの性は一つではなく、神性と人性との二つの性に分離されるとし、人性においてキリストを生んだマリアを神の母(テオトコス)であることを否定するネストリウス派4を退けた。
  - 553年 コンスタンティノープル (第5回) 公会議。
  - 680年 コンスタンティノーブル (第6回) 公会議。キリスト単意論を異端と宣告。 4人のコンスタンティノーブル総主教 とローマ教皇ホノリウスが異端とし て断罪される。

#### 2.4. 修道院の発展

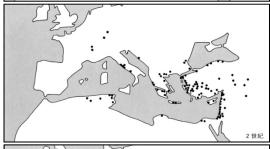
ビザンツ帝国の教会では、聖職者の妻帯は一般的で、聖職志願者は助祭(正教会では輔祭)の段階で結婚し、司祭になってからの結婚または再婚は認められなかった。主教以上の高位聖職者は独身の修道司祭から登用された。キリスト教の修道制は3世紀エジプトが起源とさされる。4世紀、カッパドキアで共住制修道院の基礎が築かれ、6世紀にシナイ半島の聖カテリナ修道院、ギリシア北部アトス山の修道院群が成立。活発化するのは10世紀以降。

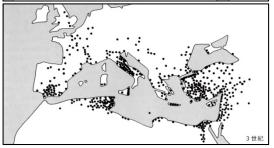
現在のカッパドキア (トルコ)



現在のイスタンブール旧市街







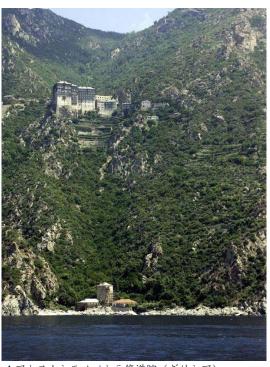


<sup>3</sup> シリア正教会(ヤコブ派)、アルメニア使徒教会、コプト 正教会(エジプトのアレクサンドリア総主教を頂点とする)、 エチオピア正教会が、外部からは単性論派とされている。 4 シルクロードを経て中国に伝えられ、「景教」と呼ばれた のはネストリウス派である。



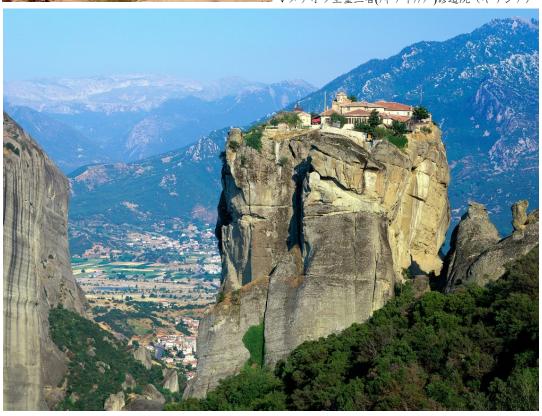
↑シメオン修道院(シリア)





↑アトス山シモノペトラ修道院(ギリシア)

←聖カタリナ修道院(エジプト) ↓メテオラ至聖三者(アギア・トリアダ)修道院(ギリシア)



# 2.5. イコノクラスム(聖像破壊運動)

- 730年 シリア出身の東ローマ皇帝レオン3世は、イコン崇敬を禁じる勅令(聖像禁止令)を発令。 旧約聖書のモーセの十戒の「偶像禁止」が根拠。
- 787年 レオン3世の孫レオン4世の皇后エイレーネー(アテネ出身)が主宰した二カイア(第7回)公会議、イコン崇敬の正統性を再確認。
- 800年 ローマ教皇レオ 3 世、フランク王国カール大帝(シャルルマーニュ)に帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言。

聖像禁止令はビザンツ帝国の小アジア側や一部の聖職者・知識人には支持されたが、ヘレニズム文化(古代ギリシア文化)の伝統の残る首都コンスタンティノーブルや帝国の西欧側の国民、イコンの製作に携わっていた修道士達の反発を招いた。聖像をゲルマン人への布教に用いていたローマ教会も、この決定を非難、コンスタンティノーブルへの税の支払いを停止、これにより既に4世紀から文化的・政治的に亀裂が生じつつあった東ローマ皇帝・コンスタンティノポリス総主教とローマ教皇の関係は決定的に悪化した。





カッパドキア・ギョレメの岩窟教会の壁画5

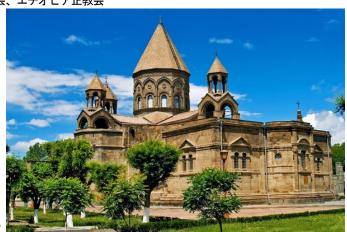
聖カタリナ修道院のイコン6

### 2.6. アルメニア正教会、グルジア正教会、エチオピア正教会

アルメニア正教会(使徒教会)、グルジア正教会、エチオピア正教会など、ビザンツ帝国に隣接する帝国の外部でも、それぞれ独特の発展を遂げていった東方正教会がある。

キリスト教が東西に分裂し、宗教改革を経て変貌したカトリックやプロテスタントと異なり、初期キリスト教の伝統をこんにちまで保持している貴重な文化遺産でもある。

エチミアジン大聖堂7(アルメニア)



<sup>56~13</sup>世紀にかけてカッパドキアに洞窟修道院がつくられた。最盛期は10世紀。

<sup>6</sup> エジプトのシナイ半島にあるカタリナ修道院はイコノスクラムとは無縁で、8世紀以前のイコンが保存されている。

<sup>7</sup> エレヴァンにあり、301~303 年創建とされる。世界最古の教会と言われるが、修復されており、創建当時のものは少ない。 カトリコス(総主教にあたる)座が置かれている。



聖十字教会8(アルメニア正教会・現トルコ)



ジヴァリ修道院 (グルジア)





ウラ・キダネ・メヒレト修道院<sup>9</sup>(エチオピア)

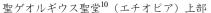


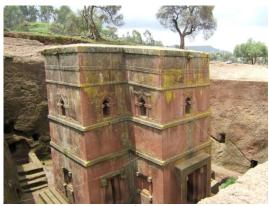
ウラ・キダネ・メヒレト修道院のイコン

<sup>8</sup> トルコのヴァン湖に浮かぶアフタマル島のアルメニア正教会の聖十字教会。915~921 年創建。

<sup>9</sup> エチオピア北西部タナ湖上の島および湖畔に40 ほどの修道院がある。







聖ゲオルギウス聖堂

#### 2.6.1. アルメニア正教会 (使徒教会)

アルメニアは、301 年頃、キリスト教を国教とし、親ローマ、親ビザンツ、反ペルシアの傾向を強めた。 キリスト教教義論争については、451 年のカルケドン(第 4 回)公会議に戦乱のため代表を送ることができず、449 年のエフェソス会議<sup>II</sup>の決議である単性論派の立場を受け入れた。

#### 2.6.2. グルジア正教会

グルジアは、350 年頃、キリスト教を国教とし、一時期、隣国のアルメニア正教会とともに単性論の立場をとったが、7世紀初頭にカルケドン派に転じた。

# 2.7. スラブ世界の成立と東方正教会の土着化

#### 2.7.1. 東西両教会の分離

858年 学者・官僚のフォティオスが聖職者の経験なくコンスタンティノープル総主教となる。

863年 ローマ教皇、フォティオスを破門(ローマ教会では「離教」)。

西方教会では、三位一体のうちの「聖霊」が「子からも」(フィリオクェ)発出するとの考えが強く、コンスタンティノープル総主教は、「信条」の改変を禁じた 431 年のエフェソス (第3回)公会議の規程を盾にこれを否定し、東西両教会の対立が強まった。

1054年 7月16日、ローマ教皇の使節としてコンスタンティノープルを訪問した枢機卿フンベルトゥス、信条からのフィリオクェの削除<sup>12</sup>、聖職者の妻帯の慣行等を根拠に、首都コンスタンティノープルの聖ソフィア教会に、コンスタンティノープル総主教ケルラリオスの破門を提出。ケラリオスは、逆に教皇の使節を破門。東西両教会が分離。

1453年 コンスタンティノープル陥落。ローマ帝国の崩壊。

#### 2.7.2 東方正教会の土着化

ビザンツ帝国の弱体化、バルカン半島やロシアなどスラブ人の居住する地域での諸民族の国家の台頭とと もに、東方正教会は、スラブ系諸民族の国家宗教ないし民族宗教として「土着化」の歴史を歩んでいく。

早くから正教を信仰していたギリシア人、アルメニア人、グルジア人のほか、この時期に正教を受け入れたのは、東スラブ族(現在のロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人)、南スラブ族(ブルガリア人、セルビア人、マケドニア人)、その他の諸民族としてルーマニア人(現在のモルドヴァ人を含む)らであった。

なお、バルカン半島の北方に居住する西スラブ族(現在のポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人、クロアチア人、スロヴェニア人)およびハンガリー人(マジャール人)は初期の段階で正教の影響を受けてい

<sup>10</sup> エチオピア北部のラビエラ地区にある。12~13 世紀の建造とされる。

単性論派に好意的な皇帝テオドシウス2世の庇護のもと、アレクサンドリア主教ディオスコロスが単性論を決議した公会議。 しかし、451年のカルケドン公会議でエフェソス公会議の決議を無効とし、エフェソス公会議も公会議の資格を取り消され、 「強奪会議」と呼ばれるようになった。

<sup>12</sup> これはカルケドン信条に対する誤解に基づいている。

## ロシア地域研究入門1

UENO Toshihiko; uenot\_gosudarstvo@yahoo.co.jp; http://www.geocities.jp/collegelife9354/index.html

るが、やがて西欧のフランク王国との関係を重視して、カトリックを受け入れていった。

南スラブ族は、ビザンツ帝国の崩壊後、オスマン帝国の支配下で、正教の信仰を守っていくことになる。 他方、9世紀以降、東スラブ族の中でも、ルーシ人(のちのロシア人)が台頭、13~14世紀のモンゴルの 支配を経て、ロシア帝国が成立、ビザンツ帝国の後裔を唱えることとなる。

### 2.8. 東方正教会のキリスト教観

日本正教会のホームページから13

イイスス・ハリストス(イエス・キリストの日本正教会訳)の十字架刑による死と三日目の復活という出来事を「神による人間の救い」として直接体験し、その証人として世界中に伝えたお弟子たちのことを特別に「使徒」と呼びます。正教会はこの使徒たちの信仰と彼らから始まった教会のありかたを、唯一正しく受け継いできたと自負します。

正教会は中世西ヨーロッパの「スコラ神学」や近代の宗教改革とも無縁でした。キリスト教会は現在は多くの教派に分裂していますが、中世のある時期までは「一つの聖なる公なる使徒の教会」(ニケヤ・コンスタンティノーブル信仰告白)としてほぼ一致していました。正教会はこの東西教会が一つにまとまっていた時代に、五世紀間にわたって合計七回開催された全教会の代表者たちによる会議(「全地公会議」325年~787年)で確認された教義や教会組織のあり方、教会規則、さらに使徒たちの時代にまでさかのぼることのできる様々な伝統を切れ目なく忠実に守り続けています。正教会と他の諸教会が『分裂』したのではなく、正教会から他の諸教会が離れていったというのが「教会分裂」の真相です。

教義的には、人間の理解をこえた事柄については謙虚に沈黙するという古代教会の指導者(聖師父)たちの姿勢を受け継ぎ、後にローマ・カトリック教会が付け加えた「煉獄」・「マリヤの無原罪懐胎」・「ローマ教皇の不可誤謬性」といった「新しい教え」は一切しりぞけます。またプロテスタントのルターやカルヴァンらのように「聖書のみが信仰の源泉」だとも「救われる者も滅びる者もあらかじめ神は予定している」とも決して言いません。かたくなと見えるほどに、古代教会で全教会が確認した教義を、「付け加えることも」「差し引くこともなく」守っています。

教会組織も、ローマ・カトリック教会のようにローマ教皇をリーダーとして全世界の教会がきちんと一枚 岩に組織されたものではなく、各地域の独立教会がゆるやかに手を結びあっているにすぎません。しかし強 カなリーダーシップがないからと言って、聖書解釈の違いや教会のあり方への理解の違いから無数の教派に 分裂してきたプロテスタント諸教会とは異なり、正教信仰と使徒からの教会の姿を各教会がすすんで分かち 合うことによって「正教会」としての一致を保ち続けてきました。

\_

http://www.orthodoxjapan.jp/seikyoukai.html

#### 2.9. キエフ・ルーシ

5 世紀以降、スロヴァキア付近のスラブ族の 一部が東に移動し、東スラブ族(のちのロシア 人・ウクライナ人・ベラルーシ人)が形成され た。

9世紀末、東スラブ族の国、ルーシ Pycb が歴 史に登場する。ルーシは、スカンジナヴィア半 島・バルト海と黒海・ビザンツ帝国(首都コン スタンティノーブル)とを結ぶノルマン人の交 易・通商ルートに位置していた。

この交易・通商ルートは、北から、バルト海→ネヴァ川→ラドガ湖→ヴォルホフ川→ (陸路)→ドニエプル川→黒海というルートで、ヴォルホフ川上流からドニエプル川上流までのあいだに、比較的平坦で短い陸路があるだけで、あとは水運がある。このルート上のヴォルホフ川中流にノヴゴロド、ドニエブル川中流にキエフというルーシの二大都市が建設された。

『原書年代記』<sup>14</sup>によると、ルーシの人々が ノルマン人(ルーシではヴァリャーク人と呼ん だ)に対して「ルーシは広大で豊かだが争いが 絶えないので、ここに来て統治してほしい」と 要請し、ノルマン人のリューリク(在位 862-879 年)がノヴゴロドに王朝を創建したとされるの で、ルーシの最初の王朝はリューリク朝と呼ば れる。2代目の王、オレク将軍(在位 879-912 年)がキエフを攻略し、キエフ・ルーシ(キエ フ公国)の歴史 が始まった。

## 2.10.キエフ・ルーシによるキリスト教の国教化

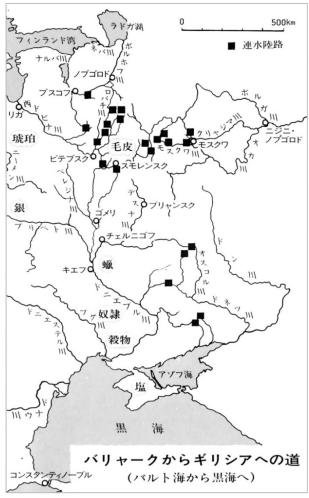
988年 キエフ・ルーシ、キリスト教 を国教とする。ヴラジーミル 大公(ヴラジーミル 1 世、在 位 980-1015 年)、洗礼を受け、 ビザンツ帝国皇帝バシレイオ ス2世の妹アンナを妻とする。

11 世紀前半 スラブ語典礼の導入。

11 世紀中頃 キエフ洞窟修道院の創建。

1223年 モンゴル軍、ルーシ南部に侵入後、撤退。

1237年 モンゴル軍、ルーシ東部から 侵入し、モンゴル(キプチャ ク・ハン国)によるルーシ支 配が始まる。





キエフのソフィア大聖堂(1037年創建)

<sup>「</sup>過ぎし年月の物語」とも呼ばれる。



ボリスとグレプの教会 (キデクシャー。1152年)



至聖生神女庇護教会(ボゴリューボヴァ。1165年)



ドミトリエフスキー聖堂(ヴラジーミル。12世紀末)



至聖生神女就寝大聖堂(ヴラジーミル。12世紀末)

キプチャク・ハン国の支配者は、少数のモンゴル人と多数のチュルク系諸民族により構成されていたが、ルーシでは彼らをタタール人と総称し、彼らによる支配を「タタールのくびき татáрское úro」と呼んでいる。モンゴルの支配は、ロシア史にとって以下のような大きな意味を持つ。

①ルーシは、アジアとヨーロッパをまたぐユーラシア帝国の支配下の一部となった。

②ルーシは、モンゴルの支配をその強大な軍事力によって強制されただけでなく、生き残りのために自らその支配を受容することを選択した。すなわちルーシは、ドイツ騎士団の支配下に入り、モンゴルに徹底抗戦する道もあったが、ドイツ騎士団によるローマ教会への服従の要求を嫌い、宗教的に寛容なモンゴルによる支配

## ロシア地域研究入門 1

UENO Toshihiko; uenot\_gosudarstvo@yahoo.co.jp; http://www.geocities.jp/collegelife9354/index.html

# を選択した。

- ③パリに比肩するほど発展したキエフが衰退した。
- ④ルーシの西部・南部が離脱し、ベラルーシ・ウクライナの萌芽が生まれた。
- ⑤ルーシの諸公国(とくにウラジーミル大公国、モスクワ公国)の専制が強化された。



至聖生神女生誕教会 (スーズダリ。1222 年創建)

トロイツェ・セルギエフ修道院(セルギエフ・パサート。14世紀)



ラザロ復活教会(キジ島。14世紀)



キリスト変容教会 (キジ島。1714年)



至聖生神女庇護教会(モスクワ。1560年)



クレムリン (モスクワ)

## 2.11 モスクワ国家の形成からロシアへ

- 1310年 キエフ府主教座、モスクワに移転。
- 1380年 モスクワ公国軍、クリコヴォの戦いで、キプチャク汗国軍に大勝。
- 1439年 オスマン帝国の攻撃にさらされたビザンツ帝国がローマに支援を求めると、ローマは東方教会 の服従を求め、フィレンツェ公会議で東西教会の合同が決定されたが、東方教会の多くは反発。 モスクワのイヴァン 3 世(在位 1462-1505 年)もこれに反発、ギリシアから送られた府主教を 合同に賛成しているとして廃し、モスクワ総主教の独立を達成。
- 1453 年 ビザンツ帝国が滅亡。
- 1472年 ローマ教会はイヴァン 3 世を懐柔するため、ビザンツ帝国最後の皇帝コンスタンティヌス 11 世の姪ゾエ (ソフィア)をイヴァン 3 世に嫁入りさせるが、かえってイヴァン 3 世はこの結婚によりビザンツ帝国の正当な後継者を名乗ることになり、「ツァーリ Царь」(ビザンツ帝国皇帝の称号カエサルのロシア語)と称し、ビザンツ帝国の双頭の鷲の紋章をモスクワ公国の国章として採用。モスクワは「第三のローマ」を自称するようになる。
- 1598年 イヴァン4世の息子フョードルの死によって、リューリク朝は断絶。
- 1613年 動乱 (スムータ cmýra) の時代 (1604-13 年) を経て、貴族会議でロマノフ家からツァーリが選出され、ロマノフ朝始まる。

## 2.12. 教会の政権への従属

- 1652 年 総主教に選出されたニーコン HínkoH は、教会 典礼の改革に着手したが、民衆の反発を呼び、 新しい儀礼を拒否した分離派 раско́льник が登 場し、教会は分裂して弱体化し、教会の政権 への従属が強まる。
- 1721年 ピョートル1世 (大帝。在位 1682-1725 年) は スウェーデンとの北方戦争 (1700-21 年) に勝 利し、1721 年のニスタット条約によりバルト 海への出口を獲得し、この間、サンクト・ペ テルブルクの建設が進められた (1703-12 年)。



ニーコンの小修道院 (イストラ。1658年)

### 2.13. ロシア正教会の発展

「第三のローマ」を自認するロシア皇帝は、西方教会の誤りを正し、正教を広めることで世界を救済するというメシア思想を持つようになり、これがロシアの対外膨張主義の遠因であるとする説があるが、これは冷戦期のバイアスに基づく説と考えられ、そのように考えるべき証拠はない。

実際、幕末における宣教師ニコライの 来日による日本における正教の布教も、 ニコライ自身の日本語習得、日本人宣教 師の育成を始めとする土着化に基づいて 実施されており、ロシア帝国の膨張主義 とは無縁であった。

1917 年 11 月のボリシェヴィキ政権の成立により、ロシア正教会は弱体化したが、第 2 次世界大戦中の愛国主義の強まりとともに正教会も復活し、ソ連崩壊後は教会の復興・再建も相次いでいる。



冬の宮殿(エルミタージュ博物館)(サンクト・ペテルブルク)